

シーソンオフの魅力発見

■慶良間諸島

那覇市から西へ約四十キロ。エクスルダグリンの海に浮かぶ沖繩県・慶良間諸島は自然の宝庫だ。同諸島の慶良間島と阿嘉島は、夏には多くのダイバーでにぎわう。だがシーソンオフの商の勢も魅力的だ。

▽窓のワルツ

濃紺の海から突然、白い霧が吹き上がった。距離は約五十キロ。サトウキビだ。二頭いる。照間味島から海流船で約二十分の東シナ海。ホエルノオッチングの参加者から歓声が上

がった。体長は十数センチ。二頭は芳ッブルとくさくさの音を立てながらゆらゆらと泳ぐ。ワルツのようだ。やがて大きな黒い尾ひれを空に突き上げ、次々と水中へ消えた。

慶良間諸島近海には一月から四月上旬ごろまでサトウキビが現れる。照間味島などでは自主的にルールを作り、ワルツの生態に配慮しながらホエルノオッチングを行っている。

ワルツは一度獲ると十五分ほどはあがらない。だが、腰から潮風を感じな

旅旅旅



夜に出会った天然記念物のケラマツカ=阿嘉島



夜に出会った天然記念物のケラマツカ=阿嘉島。島の天然記念物のケラマツカを見た。五、六頭が夜

がら船の上で待つのも長い。結局、約三時間で十回近くワルツに出会った。

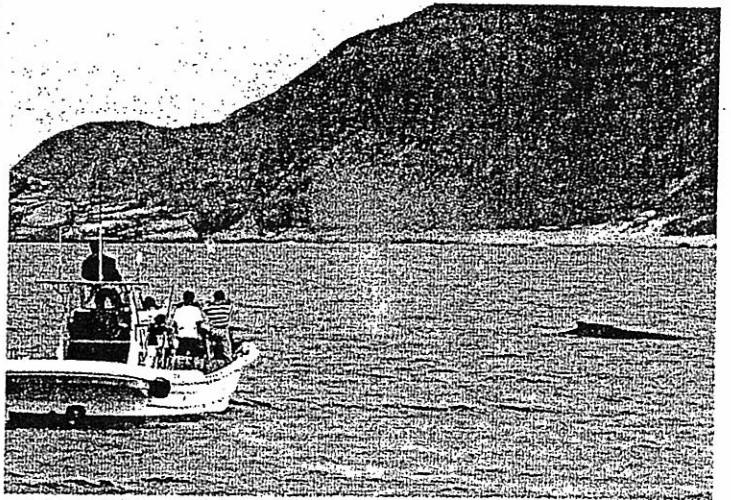
▽光放つ足跡

照間味島に戻りフェリーで隣の阿嘉島へ移動。夜を待たずに散策に出かける。車でホテルを出て約五分。林道わきの環状のライ

トを回りながら、一歩のふしに光を放つ。ワルツの足跡が夜の森に浮かび上がる。美しい星が浮かび上がった。カイトの調音音が聞こえてくる。足跡が

てくる。そこから海に入ると、恐る恐る靴のまま海に入っていく。水の中で靴が青白い光に包まれている。青い光がまわってきた。光は数秒で消えた。もう一歩。また光。海を歩くたびに光の足跡がでる。夢でも見ているようだ。

クジラ、夜の海に感動



間近に見るサトウクジラの潮吹きに驚く=照間味島近海

「夜光虫が集まっているんです。それが解説してくれた。夜光虫はプランクトンの一種で、刺戟に反応して青白い光を放つ。カイトブックにも載っていないのだが、この辺で毎年中心になるよ」と聞き、また驚く。

▽密林の中へ

翌日は雨。近々の山へ、ホテルの案内で宴会用の食材を探しに行く。畑を抜け、南国特有の樹木が茂った山へ。まぶたはジャンケルだ。ぬかるんだ道に戸惑いながら、千ギヤの野草を取る。天然の食材はどれもおいしかった。

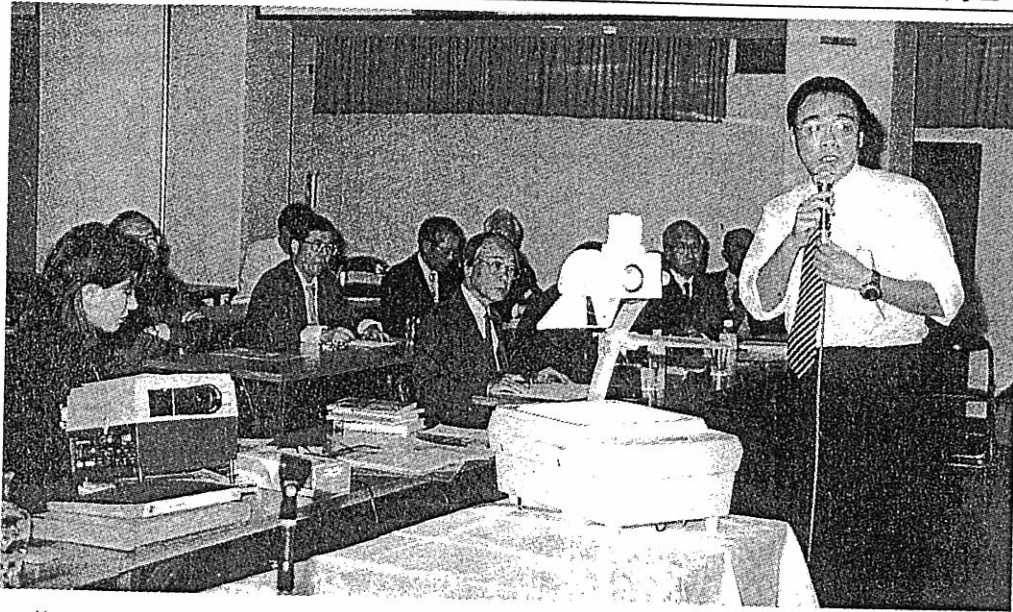
森の空気は湿度が高く、空気が濃い。深呼吸をした。風に揺れる葉の音、鳥の甲の音が聞こえる。自然がくても身近になった。

(文・工藤廣次、写真・徳橋達典共同通信記者)

【X市】照間味島 阿嘉島へは那覇市の泊(とま)港から出る高速船が便利。観光客との問い合わせは「21・4・44」電話098(098)44400。



ジャングルのような森の中で山菜採り=阿嘉島



約100人が報告会に足を運び、エコツーリズムの可能性に興味を示した=アバ220ホール

一番の売りは「人情」

モニターツアー報告会

エコツーリズムの可能性を考える

沖縄総合事務局の委託事業で、昨年十一月十二日から三泊四日の日程で行われたエコツーリズムの可能性を探る「宮古島モニターツアー」の報告書がまとまった。二十四日夜、市内アバ220ホールで報告会が開かれた。この中で、エコツーリズム推進協議会の外間梨香さん(株式会社沖縄ノムラ)は「宮古島で一番、感じたことは『人情』。宮古の人の温かさにモニターのみならず、私もとても感動していた」と話し、いやしの島・宮古島を強調した。反面、史跡、宿泊施設などの案内板が少ない、ごみが散乱しているなどの課題点も浮き彫りとなり、エコツーリズムを活用した宮古観光の道すがらが見えはじめた。

いやしの宮古島を強調

宮古島のモニターツアーは、沖縄総合事務局から委託を受けた沖縄ノムラが企画・立案。九人のモニターが、史跡めぐりをはじめ、シュノーケリング、砂糖造り、豆腐造り、野鳥・植物観察など観光資源の掘り起こしを試みた。

試みた。

同社がまとめた調査内容を見ると、良かった点に「肩の凝らない時を過ごすことができた」「民宿はその地方の雰囲気が吸収できてよい」「沖縄でしか食べられないものを、自分で収穫したもの

を食べられることに大きな喜びを感じた」「泡盛と三線の語りは最高」など、島ならではの体験を満喫した様子。

ただ、課題も指摘され、ごみ問題のほか「トイレの対策(特に女子トイレ)」「話だけではなく、自分の体を使った能動的な場面を与えてほしい」「(観光案内)配布資料に工夫がほしい」「たばこを投げ捨てる人がいる。マナーと環境の配慮を」などが挙げられた。

これらを踏まえ同社では▽情報提供体制・媒体づくり▽清潔な施設の提供▽民宿の特徴づけとオリジナルサービスの提供▽宮古の特色を活かした食料、料理の提供などを今後の取り組みとして挙げた。

外間さんは「エコツーリズムは地域住民一人ひとりの意識が大事。皆が一丸となって、協力していかなければ長くは続かない」と話した。

また、「宮古島は石垣に比べ、観光資源に乏しいと言われるが、そうではない。自然に眠る資源を掘り起こせば、充分な可能性を秘めている」と強調。その上で、地元を詳しく知る案内人と行政

による組織の結成を提案した。

これに対し伊志嶺亮平良市長は「行政の窓口キーパーソンを置き、エコツーリズムに関連した協会の設立を考えていきたい」と話し、積極的に取り組んでいく姿勢を見せていた。

同報告会では、日本トランスオーシャン航空(JTA)の殿祥夫社長らがゲストとして出席し「私のグスクめぐり」と題して講演した。殿社長は「宮古は文化的な史跡が数多くある」と話し、

宮古のエコツーリズムの可能性に興味を示した。また、方言はその地域の文化だとして「島を訪れる観光客の人はその言葉にやすらぎを感じると思う」と話し、方言の大事さを呼びかけていた。

エコツーリズム 地域の資源の保護や観光業の成立、地域振興の融合を目指す観光の考え方。旅行者に魅力的な地域資源とふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする。